

る初期時代の述作を續々發表して、中國研究家としての博識を認められることになりましたが、急に名聲を博するやうになつたのは、中央亞細亞の探檢に従事してからのことでもあります。一九〇六年六月にパリを出發し、ロシアを経てトルキスタンに入り、一九〇七年即ち明治四十年十二月に有名なる敦煌の千佛洞を調査して、古書古記録古畫の類を鑒別選擇し、その幾千卷を獲て引上げたのであります。今日パリの國立圖書館やギメー博物館に收藏してあるのがそれでありませう。一九一一年 Collège de France にかかれた中央亞細亞の言語歴史考古學講座擔任の教授となり、一九一四—一九一八年の戰時中には、豫備士官として初めはダーダネルに勤め、ついで北京公使館附き陸軍武官となり、本務の傍中國及び蒙古の研究に精進し、一九二〇年には學士院會員 *Membre de l'Institut* に擧げられ、一九三一年には文藝院 *l'Academie des Inscriptions et Belles-Lettres* に迎へられました。數へ年五十四歳の若さでこの老儒林の間に伍することになつたのは誠に異數のことでもあります。一九三五年には亞細亞學會 *Société Asiatique* の會長、また地理學會副會長に選ばれ、別に有名な東方學雜誌通報を一九二一年以來コルディエ氏と共に編輯し、コルディエの歿後一九二五年以降はこれを主宰して來ました。(一九二六年以降は *Duyvendak* 氏と共編)。この間歐米諸國の大學や學會に招かれて講義や講演に従事したこと、一々列擧し難い程頻繁で、今これら諸國の東方學を修めるものは、どこかでその講義を聽かなかつたものは少いというても殆んど誤らないであらうと思ひます。我が國には昭和十年一九三五年に來遊し、この京都には六月二十日から二十五日まで滞在し、出發當日の多忙な時間を繰合せて、曾てパリで交を結んだ内藤博士の一周忌の法要に參詣して追悼の意を表したこともありませう。一昨一九四五年アメリカのハーバード大學で講義してフランスに歸つた後、二ヶ月許り病床に在つ